

ギダイの運動施設

健康的な学生生活を送る上で、体調管理は非常に重要です。定期的な運動を行うことは、体調管理だけでなく、体を鍛えることもでき、心を強くします。今回は学生、教職員が自由に利用できる学校の運動施設を紹介したいと思います。

屋外の運動施設は、多目的グラウンド、



グラウンドの様子

陸上競技場、ラグビー場、野球場、サッカー場、テニスコートがあります。授業が終わった放課



テニスの練習風景

後や休日には、サッカー部、野球部、テニス部やアメフト部など、さまざまなサークルが日々練習に励んでいます。広いグラウンドで練習



アメフト部の練習風景

が行えるため、充実した練習ができ、大会でもよい成績を残すことができます。新潟県中越地震の際にグラウンドにひびが入りましたが、修復され今では快適に運動ができます。

屋内の施設には、体育館、屋内プール、トレーニングルームが体育・保健センターの隣にあります。屋内プールは、25mの温水プールで6コースあり、5月上旬から11月の末まで利用することができます、主に水泳部が練習場



水泳部の練習風景

所として利用しています。学生や教職員は、水泳部員による監視が行われている時間帯ならいつでも自由に泳ぐことができます。夏にな



トレーニングルームの様子

ると、暑さをしのぎに来た多くの学生でにぎわっています。水泳をすると体中の筋肉が鍛えられ、健康にとっても良いです。また、日々のストレス発散や、軽い運動にもなります。屋内プールの2階スペースには、トレーニングルームがあります。ウエイトマシンや運動負荷をかけ体力測定が行えるトレーニングバイクなど、本格的な設備が整えられています。夕方から夜にかけて、勉強や研究の息抜きをしにきた学生や、運動系のサークルの人が筋力トレーニングのために利用しています。



取材協力してくれた学生
水泳部 菅野航輔さん
アメフト部、テニス部の皆さん



ギダイみてある記 取材班
経営情報システム工学専攻2年
笠原統徳(長野高専出身)(右)
経営情報システム工学課程4年
市毛貴博(茨城高専出身)(左)

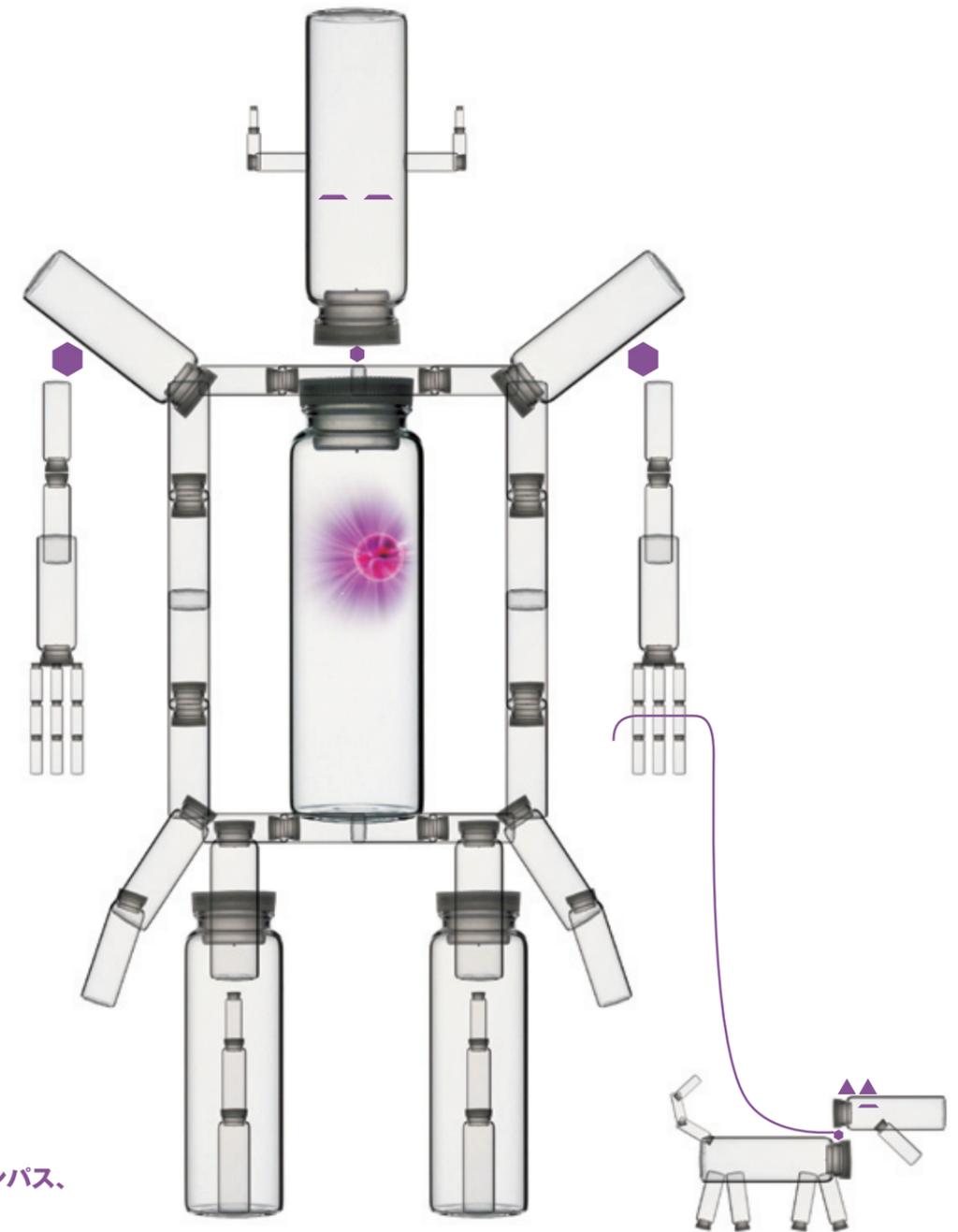
VOS

VITALITY ORIGINALITY AND SERVICES

長岡技術科学大学 広報



No.153
2009.September



特集 新学長就任

CONTENTS

- 02_ 特集:新学長就任
- 14_ 行事報告「オープンキャンパス、メキシコ・デイin長岡」
- 15_ 模擬国連
- 16_ 私の抱負/退職にあたって
- 18_ 長岡の歴史探訪/トピックス
- 19_ 追悼 芹澤 尚 先生
- 20_ ギダイみてある記/編集後記

編集後記

9月16日より、新原皓一新学長の下、新執行体制がスタートしました。今号はその特集として、新執行部のメンバーには抱負を、本学にゆかりの深い方々にはエールを頂きました。わが国の大学を取り巻く環境は、近年急激に変化しており、本学も決して例外ではありません。守るべき伝統は守り、変えるべき慣習は思い切って変える。ある時は保守的に、またある時は革新的に、このメリハリが今の大学に求められているのではないかと思います。今後の長岡技術科学大学の動向に、是非ご注目ください。

VOSの由来 本学のモットーである、Vitality, Originality, Servicesの頭文字をとって、本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。

平成 21 年 9 月 16 日に、新原新学長が就任しました。

本学が国立大学法人となってから 5 年半あまりが経過し、また少子化時代を本格的にむかえ、学生および教職員をとりまく環境も、日々変化を続けています。

本特集号では、こうした時代の変化や社会のニーズにどう応えていこうとするのか、新学長へのインタビューのほか、今後の本学に対する期待や要望など、

長岡技大にゆかりの深い関係者の方々からエールを頂きます。



長岡技術科学大学長

新原 皓一

KOICHI NIIHARA

プロフィール

生年 / 昭和 16 年

| | | |
|----|--------------|--------------------------------------------------|
| 略歴 | 昭和 43 年 3 月 | 大阪大学大学院工学研究科原子力工学専攻修士課程修了 |
| | 昭和 43 年 4 月 | 東北大学金属材料研究所助手 |
| | 昭和 49 年 2 月 | 工学博士 (大阪大学) |
| | 昭和 53 年 10 月 | 東北大学金属材料研究所助教授 |
| | 昭和 61 年 4 月 | 防衛大学校教授 |
| | 平成 元年 7 月 | 大阪大学産業科学研究所教授 |
| | 平成 3 年 4 月 | 大阪大学産業科学研究所附属高機能極限材料研究センター長 (平成 7 年 3 月まで) |
| | 平成 7 年 4 月 | 大阪大学産業科学研究所附属高次インターマテリアル研究センター長 (平成 13 年 3 月まで) |
| | 平成 13 年 8 月 | 大阪大学評議員 (平成 16 年 3 月まで) |
| | 平成 17 年 3 月 | 定年退職 |
| | 平成 17 年 4 月 | 国立大学法人長岡技術科学大学極限エネルギー密度工学研究センター教授 |
| | 平成 17 年 4 月 | 国立大学法人長岡技術科学大学極限エネルギー密度工学研究センター長 (平成 19 年 3 月まで) |
| | 平成 19 年 3 月 | 定年退職 |
| | 平成 19 年 4 月 | 国立大学法人長岡技術科学大学特任教授 |
| | 平成 21 年 9 月 | 国立大学法人長岡技術科学大学長 |

専門分野 / ナノ材料工学

新原新学長インタビュー

聞き手 / 若林 敦 (教育開発系 准教授・VOS 専門部会委員)

— 新原先生は、平成 17 年 (2005 年) の 4 月に、大阪大学から本学に赴任されました。それから 4 年後の今年 6 月、多くの教職員の支持を得て、学長に選出されました。その選考期間中も、また、その後も、先生は精力的に学内の教職員との懇談を行ってこられました。その懇談を通じて、新学長への期待として最も感じておられることは、どのようなことですか。

懇談の中で、私は皆さんのお話を伺うとともに、この大学で実現したいプランや私の信念を語ってきました。そのプランや信念、あるいは将来構想への期待かなと感じています。

大学は教育と研究の両方によって未来を創る場です。国立大学法人である我々の使命は国民の皆さんに明るい未来を提示することであると私は信じています。また、本学は時代を先取ってしなやかに発展出来る適正規模の大学だと思います。その「しなやかさ」を活かし、これからの時代のモデルとなるような先取り型、あるいは待ち伏せ型と言ってもいいかもしれませんが、そのような大学を構築する先頭に立ちたいと思っています。

— 特に、若手教員からの期待には大きなものがあると思うのですが、それはどのようなのだとお考えですか。

若い先生方はとにかく忙しい。私が同じくらいの年齢だったときとかなり違います。その中で、皆さんが感じているのは、その忙しい思いをして行った仕事の意味やそれに対する評価への疑問のように思います。そのような

若手教員が期待すること、そして私が学長として出来ることは、皆さんの能力をそれぞれの本分に注ぐことが出来る環境を創ることではないか。

もちろん、今の社会情勢を見れば、私が学長になっても、若い人たちにどんどん時間的にゆとりを持たせてあげるということは難しいかもしれません。しかし、私の経験から言っても、取り組んでいてやりがいを感じる仕事、自信や誇りを持てる仕事については忙しいとは感じないはずなのです。しかも、若手の時代は短時間の間に卓越した成果を生み出せる。そして、それだけの素養が本学の教員にはあると思っています。若い先生方が自己の本分を生かしながら教育・研究という大学本来の仕事をやっていく、そのお手伝いが出来れば良いなと考えています。

— この 9 月 16 日に、新原学長のもとで、本学の新しい執行体制が発足します。この新執行部にはどのような特徴があるのでしょうか。

大学の果たすべき使命は多様化しています。ですからそれぞれの分野におけるエキスパートが必要不可欠です。教育研究、社会貢献をはじめとした様々な分野で、多くの成功体験とそれによる行動力を持った人選を心がけました。中でも、高専との連携を重視し、また、諸外国の大学に比べ今の日本の大学に不足している戦略性や広報手法・経営感覚を持つことを心がけました。教育体制においては、これまでこの大学もトライしていない、将来を見据えた新しい体制を作れる突破

力のある布陣を意識し、加えて、前執行部との継続性にも配慮しました。年齢的には、将来像を描くことになりますので、若い教員の登用も行っています。

— 新執行部として、最初に重点的に取り組みたいことを、いくつかお話し下さい。

まず最初に行うべきことは、本学の進むべき道、ビジョンを明確にすること、全学がそれに向かって進むための規範を作ることだと考えています。そのために、まずはできるだけ多くの教職員、学生、地域の方々とお会いし、意見をうかがいたい。私のプランはあるのですが、はたしてそれが正しいのか、ほんとうにこの大学で実行していけるのかといったことを確かめていかなくてはなりません。その上で、厳しいかもしれませんが、今年中、遅くとも今年度中には本学が進むべきビジョンを明確にしたいと思っています。

また、その過程で、教職員、学生、地域の方々の中に、もし壁があるのであればこれを取り払いたい。さらに、皆さんのことを知り、私のことも知っていただきたい。そこが出発点であろうと考えています。

— 先生が学長をなさる 4 年間で、この大学をどのような大学にしていきたいとお考えですか。

本学は技術科学を標榜する世界的にも希有な、オリジナリティあふれる存在です。これに加えて、本学を「無くしてはならない存在」に



Interview to KOICHI NIIHARA

そのためには、本学でしか学べないこと、取り組みにくいことにチャレンジしていく必要があります。たとえば、これまで我が国の大学における教育研究の中では余り着目されてこなかった、安心安全のコンセプト、戦略や経営・リスク管理などの考え方や、ものづくりのセンスの両方をわかる技術者・研究者を輩出する特徴ある大学になればいいなと考えています。

また、無くてはならない存在となるための方策として、国際化は外すことのできない観点だと思っています。現在の本学の国際化は主として学部生に関係したものがほとんどですが、私は大学院生中心の国際化を目指したい。このことによって、自国に戻ってもその大学、企業、国の機関で主要なポジションを占め、中心的な立場となって活躍できるOBを輩出したいと思っています。我が国の

発展のことを考えれば、本学で現在手薄になっていると思われる欧米の大学院との連携も推し進めたい。

これらがこの大学の存在理由になるまでもっていきたいと思っています。

— 新原先生は、阪大だけでなく、東北大にも長くおられ、そのほか防衛大、米国バージニア工科大、韓国・中国のいくつかの大学で教授・客員教授などを歴任されています。セラミックス研究・新素材開発分野で世界的に著名な研究者であられ、米国セラミックス学会フェロー、またこの6月からは日本セラミックス協会会長という重職にも就かれました。さらに、ベンチャー支援のNPO法人を設立され、自らもベンチャー企業を創設するなど、たいへん幅広く活躍しておられます。このような豊富な経歴は、新学長としてのお仕事に

どのように活かされていくでしょうか。

私はこれまでにいくつかの大学や組織に関与して参りました。中には海外でのベンチャー企業設立のお手伝いなど、少し変わった経験もあります。その中で、個々の成功体験を通して得られた確固たる自信の積み重ねがいかにかに人を成長させるかに気づきました。

そのためには多くの先達たちの導きが必要不可欠でした。人との出会いは私の人生の幅を広げてくれたと確信しています。私は、43,4歳の頃に、今後人を嫌いにしないと心に決めました。人を嫌いになってしまうと、その人からの様々なご支援をいただけなくなってしまいます。これほど人生の幅を小さくし、また成功のチャンスを逸してしまうことはありません。

学長という仕事を遂行する際においても、

直江兼続ほどとはいわないまでも、すべての人を愛すること、これを心に刻んで、皆さん方と一つ一つ成功体験を積み上げていきたい。そうすることによって、これまで以上に自信と誇りが持てる大学に、また、人が成長してゆける大学になれるのではないかと考えています。

— いま、日本も世界も激動の時期にあるように思います。そのうねりの中で本学の舵を取る新原新学長の手腕には、大きな期待と注目が集まっています。最後に、本学学生、教職員に向けて、また、このVOSを読んでくださっている学外の方々に向けて、それぞれ呼びかけたいことを、ひと言ずつお願いします。

学生の皆さん、本学の先輩方を見て下さ

い。卒業生がいかに多様な分野で活躍しているかということに気づくでしょう。皆さんはこの大学で学んでいるということに誇りと自信を持っていい。そして、皆さんの持っている熱い情熱を私にぶつけて下さい。ともに輝かしい未来を創りましょう。

教職員の皆さん、年齢の壁、分野の壁、すべての壁を突破し、先取性をキーワードに理念を持って皆さんの本分に取り組み、誇り高い大学として、本学の魅力はますます高まるはず。大学の骨格を担うのはなんと云っても皆さんです。その力をいただきたい。ともに歩みましょう。

高専の学生、教職員の皆さん、技術科学大学とオール高専の力を結集すれば、世界のどの大学にも負けない多様性と広汎性を備えたネットワークを構築できます。高専と技大の大学院までが一貫性を持って取り組

む、世界に類を見ない柔軟性を持ったスキームによって、技術科学立国を担う技学のDNAを持った人材を輩出できます。ともに夢に向かってがんばりましょう！

地域の皆さん、From the Green この豊かな風土は何物にも代え難い財産です。米百俵の精神の息づくここ長岡に世界有数の技術科学大学が立地しています。大学は地域の文化レベルの向上を担う存在であることはもちろん、地域のランドマーク、誇りであるべきです。私はこの皆様方の誇りをさらに発展させたいと考えています。壁はありません。ご支援をよろしく願い申し上げます。

— どうもありがとうございました。

(2009.8.28)

学長退任にあたって 一光陰矢の如し



MESSAGE

前長岡技術科学大学長
小島 陽
YO KOJIMA

本年9月15日をもって学長を退任することになりました。思えば6年間、光陰矢の如し、あっという間に過ぎました。平成15年9月16日から服部前学長より学長職を引き継ぎ、半年後には、国立大学の法人化という我々大学人にとっては、未曾有の改革が断行されました。幸い、既に、服部前学長のもと準備がされていましたので、スムーズな移行が行われました。

本学は開学以来、四半世紀にわたり「実践的・創造的能力を備えた指導的技術者の養成」の理念の基、多くの優秀な人材を社会に輩出してきました。豊橋技術科学大学とともに、技術科学の進展に大きく寄与してきました。特に、初代川上正光学長の下、VOS(Vitality:活力, Originality:創造力, Services:世のための奉仕)の精神で大学院に重点を置いた新構想大学としての理念は建学当初から明確で、変わりませんでした。さらに、高専との強い連携や学部・大学院一貫教育といった本学の個性、単科大学の特長を堅持し、一層強化していく必要がありました。この精神は、平成16年の法人化にあっても、本学の基本理念として、さらに、進化、発展することを再確認し、新体制でスタートしました。

法人化で学内整備に追われていた時、平成16年10月23日に新潟県中越地震に本学も見舞われました。私自身は、東京の自宅におり、大学を留守にしていました。普段は、3時間ほど戻れるところ、長野経由で道路迂回路など行きつ戻りつして、約8時間かけてようやく、大学にたどり着きました。余震や停電などの中、学生、教職員の安否確認などに追われました。幸い人的損害もなく、被害は軽微にすみましたが、長岡高専の被害は大きく、事務局の仮住まい、卒業研究の手伝いなど、若干の援助はできました。教職員の一丸となった対応は災い転じて福となすを地で行った感があり、ご協力いただいた教職員の皆様に改めて大変感謝いたします。

在職中の6年の間に、平成16年4月の経営情報システム工学専攻の設置、機械創造工学専攻・電気電子情報工学専攻の改組、平成18年4月の大学院技術経営研究科(専門職学位課程)システム安全専攻の設置、生物統合工学専攻(博士後期課程)の増設など教育課程の充実をはかりました。研究面

は、高性能マグネシウム工学研究センター、アジア・グリーンテック開発センター、メタン高度利用技術研究センターを設置しました。その他に、知的財産センター、教育方法開発センター、共通教育センター、産学融合トップランナー養成センター、安全安心社会研究センターなど多くのセンターの設置を行いました。

平成18年10月には、開学30周年記念式典・記念事業も成功裡に挙行できました。

昨今は、大学機関別認証評価、JABEE、中期目標・計画の評価、教員データベースの作成など教職員には負担が増えてきておりご苦労をかけています。

教育面では、現代GP、大学院GPなど、また、国際化推進プログラムの採択など多くのプログラムを採択してもらいました。

国際化については、多くの海外の大学、研究機関と学術交流を結び、学生交流、共同研究を推進し、ハノイ工科大学を最初として、ツイニング・プログラムと称し、ハノイ工科大学で2年半学んだ学生を本学で3年生に受け入れ学部を卒業させ、両大学の学位を取得させるプログラムを開始し、その後、ホーチミン市工科大学、ダナン大学、中国鄭州大学、さらにメキシコのモンテレイ工科大学などに発展しています。

最後に、長岡技術科学大学には、29年6か月の長きにわたりお世話になりました。機械系助教授、教授時代には、有能な同僚、教え子に恵まれ、幸運にも「水に浮くマグネシウム合金」の開発、科研費特定領域研究「高性能マグネシウムの新展開—21世紀の超軽量金属材料—」の代表者、21世紀COEプログラム「ハイブリッド超機能材料創成と国際拠点形成」のプロジェクトリーダーなどを務めさせていただき悔いのない教育研究生活を送ることができました。皆さんに感謝いたします。学長時代には、丸山久一理事・副学長、西口郁三理事・副学長には、それぞれの分担を力の限り発揮していただき執行部としていささかでも技科大の発展に寄与できたものと自負しております。

新原新学長を中心に新執行部による新たな展開をご期待し、関係教職員、学生諸君に深甚の謝意を表し、退任の挨拶といたします。ありがとうございました。

次の飛躍を目指して:豊橋技術科学大学の組織再編



MESSAGE

豊橋技術科学大学長
榎 佳之
YOSHIYUKI SAKAKI

まずはじめに新原皓一先生の学長ご就任をお祝い申し上げます。さて、両技科大は、主に高専卒業生を受け入れ、高度な実践的、指導的技術者を育成することを使命とし、時代と共に進化しつつ今日に至っている。しかし、近年、大学を取り巻く社会環境は大きく変化し、今後の進むべき方向を再検討すべき時期に来ている。本学ではこのたび次の10年、20年先を見据えた将来計画の策定を行った。本学の「思い」を同じ使命を担う両技科大の今後の発展へ向けた議論の材料として供したい。

次代を見据えた教育・研究組織の再編:今後の持続的発展型社会の構築に求められる新たな技術開発、技術者養成を念頭に、本学では「我が国の基幹産業を支える先端技術分野」に加え「新たな持続的発展社会の構築に対応する先導技術分野」を新たな柱とし、組織として新時代への方向性を明確に打ち出した。また教育・研究の「タコつぼ化」を避けるため8課程に細分化されていた課程を5課程に統合した(図1を参照)。

幅広い視野を醸成する教育:本学では基礎教育・訓練と専門教育を交互に進める「らせん型教育」を基本としているが、環境問題など複合的課題に対応できる能力を育成するため新たに総合教育院を設置し、生命科学、環境科学を必修化するなど、幅広い視点から物事をみる能力を醸成する教育プログラムを

強化した。また次代の産業を主導する「よい意味でのエリート技術者」を養成するために新たに企業と協働で人材養成を行う「テーラーメイド・バトンゾーン教育プログラム」(図2を参照)を大学院に導入する。

世界の研究拠点へ:本学はナノフォトニクス、IT農業など特色ある先端研究領域の開拓に挑戦しているが、今後は世界的な研究拠点を構築すべく、その第1弾として本学が世界に誇るセンサーチップ技術と脳科学など「先端知」が融合する「エレクトロニクス先端融合研究所」をG-COEの発展形として開設する。

組織の機動性の確保:来るべき激動の時代に備えて本学が組織としての確かな柔軟性、機動性を確保するため、学長主導の「機動性をもった人事決定システム」や国際戦略本部、産学連携本部、広報戦略本部など本部組織を確立し、次の時代を睨んだ人事選考や諸活動を機動的に進める体制を整えた。

以上、本学の計画の一端を紹介したが、今回の策定作業を通して学内に「次代を担う真の技術者を育てるという使命感」、「新しい時代を切り拓く世界最先端の研究、開発を進める気概」などが一段と醸成されたことを記したい。最後に、新学長のもと長岡技術科学大学が一層の発展をされることを祈念すると共に、本学との連携を一段と強めてくださることをお願いしたい。

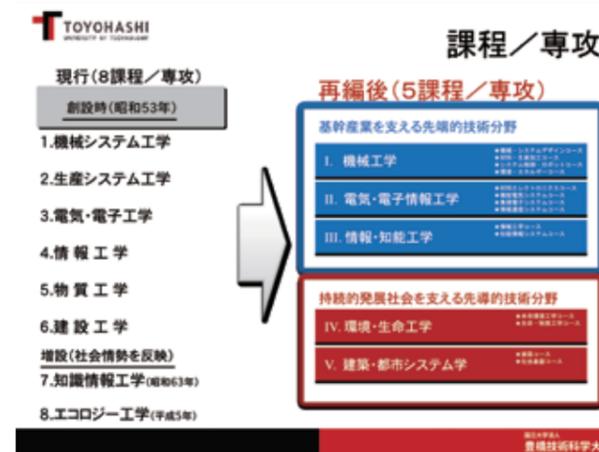


図1



図2



長岡工業高等専門学校校舎



長岡工業高等専門学校長
高田 孝次
—
KOUJI TAKADA

高等教育ユニバーサル化の中での高専と技科大

高専制度は誕生以来もうすぐ半世紀を迎えます。この間、卒業生諸氏の活躍は社会から高い評価を得て今日に至っておりますことは、高専教育に携わる私共の誇りです。

一方、高専を取り巻く環境は大きく変化しました。高等教育のユニバーサル化、工業技術の高度化、産業のグローバル化、15歳人口の減少等々です。このようなことを背景とし、これからの高専の在り方に関して、昨年末(平成20年12月)、中央教育審議会において「高等専門学校教育の充実について」と題する答申が取り纏められました。

答申は、各高専が自主的・自立的改革に不断に取り組むことを求めた上で、教育の方向性として「中堅技術者の養成から、幅広い場で活躍する多様な実践的・創造的技術者の養成へ」向かうべきことを明示しております。同時に、専攻科の明確な位置付けと地域ニーズを踏まえた充実、産業界や地域社会との連携強化などを含んでいます。

このように、今回の答申では高専教育充

実の方向として、量的拡張ではなく質的な充実に重点が置かれていますが、私は特に、高等教育のユニバーサル化が進む中で、15歳から5ないし7年の一貫専門教育という高専システムは、より質の高い技術者を養成するという観点から、改めて、その力を発揮すべき時が来たと思っています。例えば、創造性の涵養です。創造性は教え込んで育つものではなく、環境を整えて開花を促すものといわれますが、頭脳が柔軟な15歳で入学し、その後はいわゆる受験の枠に捉われることなく専門分野について密度の濃い勉強ができる高専の環境は、若者の創造性を刺激し個性を伸ばす場として大変優れていると思います。後期中等教育段階を取り込むことによって生まれているこの高専の特性は、今後さらに具体的な工夫によって磨かれるべき点でしょう。そして、技科大との教育の接続や連携がこの特徴をさらに鮮明にし、若者に一層魅力のある「高等技術教育」のモデルが示されることを期待します。



新潟県立長岡高等学校長
木村 宗文
—
MOTOFUMI KIMURA

地域における学校の役割

長岡高校としましては、とりわけSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定以来、理数科の課題研究などで長岡技術科学大学の先生方には一方ならないお世話になってます。毎年、大学の講義室をお借りして実施する課題研究発表会では、高校生としてはかなりレベルの高い研究結果が発表され、他校の生徒・職員も加わって鋭い質疑が交わされています。本物の学問の一端に触れさせていただくことで、生徒たちは確実に学力を伸ばしてきていると思っています。

一方、昨春秋以来の未曾有の不景気の中で、来春の高校生の就職戦線は大変厳しいものとなっております。このため長岡地区高等学校長会では、ハローワーク長岡の要請を受けて、7月中旬から下旬にかけて求人開拓のための企業訪問を行いました。私自身その中で改めて認識したことがありました。

それは、長岡地域にはしっかりした企業がたくさんあり、技科大がこれらの企業にとって欠かせないものになっているということです。

いくつかの企業担当者は言いました。

- ・苦しい時代だが、一定の資格や知識・技能を持った人は欲しい。
- ・うちは技科大にスタッフを派遣して研究開発をしている。

高校の側から見ると、多くの場合、大学は生徒の進学先としか見ません。生徒・保護者が大学を選ぶ基準も、試験でどれだけ点数がとれたかによるものがほとんどです。技科大が地域産業にどれだけ貢献しているかということや、卒業生がどのようなところで活躍しているかなどが分かると、生徒たちの見る目も変わってくるのではないかと感じました。

地域にある高校としては、全国あるいは世界を視野に入れながら、子どもたちの力を最大限に伸ばすのが使命と考えています。同様に長岡技術科学大学が地域における一定の役割を果たしつつ、世界的レベルでより一層発展されるよう祈ります。

今後とも高大連携して地域の人材の育成がはかれまよう、よろしく願います。



課題研究発表会



MESSAGE

長岡商工会議所 会頭
丸山 智
SATOSHI MARUYAMA

>>> 大学への期待

新原皓一先生の学長ご就任、心よりお祝い申し上げます。

昭和51年10月に開学、初代の川上正光学長以来、第7代目の学長でございます。

長岡技術科学大学は、開学以来、他の大学に先駆けて、日本で初めて「産学協同」を基本理念に掲げられ、民間企業への実務訓練の取り組みや社会人教育の実施など、地域に「開かれた大学」として、多大な地域貢献をされてまいりました。

また、産業界との連携では、企業との共同研究やまちづくりなど、様々な分野で、学長はじめ、諸先生の皆様から地域経済の活性化にご指導・ご協力を賜わり、あらためて敬意を表する次第であります。

私は、いかなる時代においても、「業績は体質の結果」と言われますように、体質を変

えないと業績は上がらないと考えております。トップが変わった分しか良くなりません。

また、我々はいかに現場を強くするかであります。それは、その企業のトップ自ら、現場を見る力、現場を感じる力、現場を体験する力、現場に立ちかえる力、成長の源はまさにこうした「現場力」が一番大事であると思います。

以上のことを実現してゆくためには、より現場に近い高度技術・技能・科学分野からの絶大なご指導を賜わらなければなりません。

新原皓一新学長の多様なキャリアとリーダーシップのもとに、長岡技術科学大学から全国・世界へと、次世代に向けた技術の創造と個の光る優秀な人材の養成がはかられ、一層VOSが伝播、飛躍されますことをご期待申し上げます。お祝いのご挨拶とさせていただきます。

「エコ・チェンジ」社会の到来。



「エコ・チェンジ」とは

素材や商品の購入／建物等の設備投資／新商品の開発などあらゆる選択の際に、よりエコロジーを選んでいくことです。

市場では、企業経営だけでなく、個人や地域など、全ての場面において、地球環境を考えた行動が優先されています。

地球のことを大切に思うとともに、市場の動向を感じながら、「よりエコな選択」を行っていきましょう!!

長岡商工会議所

MESSAGE

President of the American Ceramic Society (2009-2010)
Dr. Edwin R. Fuller JR.

First please allow me to call Prof. Koichi Niihara, "Koichi" because we are good friends for many years. I would like to congratulate Koichi for being elected as the President of Nagaoka University of Technology (NUT), Japan. In the field of materials science, as it is so in other fields, NUT has been recognized as one of the most prominent technical universities over the world for their excellent and vital research activities.

I have known Koichi well for more than twenty years, and have been consistently impressed by his scientific and engineering expertise in the area of ceramics and composites as well as his sincere, friendly and magnanimous personality. He has conducted very important and innovative research works in the ceramic materials field in the past few decades. One of the most important achievements of his early studies is fabrication of massive CVD-silicon nitride and silicon carbide with markedly high deposition rate. For this accomplishment, he was presented Richard M. Fulrath Award from the American Ceramic Society in 1983. He has been also famous for the study on evaluation of fracture toughness of ceramics using the indentation fracture method. The footprint is left behind as the

>>> Congratulations!

"Niihara's Equation" which has gained common recognition and has been most frequently used among ceramic researchers over the world. It should be noted, however, that the most remarkable achievement, which gave Koichi world-wide recognition as outstanding personality, is "Nanocomposite Concept". This totally new concept of materials design made a great impact onto the material community over the world, particularly young researchers and scientists. His recent study is focusing on the multi-functional ceramics, which has brought over 100 new findings and have expanded the frontier of our knowledge. While devoting him to education and research in universities, Koichi has been leading many research programs to apply advanced materials into a variety of industries. Actually, a number of the nanocomposite ceramics he developed have been already commercialized. Obviously he is an excellent researcher not only for the aspect of fundamental science but also for industrial applications.

In these activities, Koichi has always tried to tackle various problems in ceramic researches with very vital, energetic and forward-looking attitude, which strongly attracts and affects many researchers and engineers. He has been committed to the formation of human resources and to the preparation of the next generations of materials scientists and engineers not only in Japan but also worldwide. Over the years, Koichi has been involved in international collaborative researches with various universities, industries, and national laboratories in USA, Germany, UK, France, Finland, Poland, Korea, China, Australia, India, Italy and others, and has mentored, assisted and supervised many graduate and under-

graduate students and young scientists and engineers in these countries, in addition to those in Japan.

Presently Koichi serves as the President of Ceramic Society of Japan, which is one of our most important partner societies, and I am particularly pleased to be the President of the American Ceramic Society at the same time. In addition, for his worldwide reputation, he has been appointed as the President of Asia-Oceania Ceramic Federation (AOCF) and the President of the 3rd International Congress on Ceramics (ICC3), which will be held in Osaka, Japan, 2010. ICC is the most authoritative congress series on ceramics, endorsed by the International Ceramic Federation (ICF).

For realizing sustainable development in future society, we are now strongly required to develop innovative science and technologies which can harmonize environmental friendliness and industrial progress. Given such a social requirement, the mission and role of technical universities like NUT will be critically important. Based on his outstanding professional achievements, scientific and engineering expertise, and strong leadership, I am sure and very confident that Koichi will be able to lead NUT to successful and bright future.



In Vancouver on June 2, 2009



MESSAGE

理事・副学長
(教育研究、中期目標・計画、将来構想担当)
武藤 睦治
—
YOSHIHARU MUTOH

>>> 理事・副学長就任にあたって

本学が一期生を迎えた昭和53年4月に助手として赴任して以来、大講座制、産学連携など時代を先取りする優れた試みの下、勝手気ままに研究教育、国際連携などに取り組ませていただいていた。このたび新原新学長から理事・副学長のお話をいただき、他に適任の先生方がおられるのにとためらいつつも、大変光栄に思い、お引き受けさせていただきました。これまでの勝手気ままな研究教育とは異なる、大学の運営という仕事は未知のもので、強い不安と責任を感じているところです。小島前学長はじめ執行部の先生方は、法人化という大学の枠組み

が変革された中での大学運営を見事に成し遂げられるとともに、大きな成果を上げ、本学の発展に邁進されました。それらの経験・実績を踏まえ、新原新学長が示される本学のこれからの目指すべき方向(ビジョン)の実現に向け、微力を尽くしたいと思います。世の中の動きはますます早くなってきています。改組など将来計画も含め、拙速は困りますが、迅速に対応することが本学の発展にとって重要と思います。そのためにも、教職員の皆様のご助言・ご協力が欠かせません。是非よろしく願い申し上げます。



MESSAGE

理事・副学長
(研究経営、評価、産学官・地域連携担当)
高田 雅介
—
MASASUKE TAKATA

>>> 理事・副学長就任にあたって

このたび、これまで担当していた工学部長、工学研究科長に加え、研究経営、産学連携、地域連携、評価全般を担当することとなりました。研究経営というのは新体制から導入される業務となります。

私は、約30年間、電気系の教員として学生指導にあたってきました。振り返れば、6年前の法人化が、本学の、そして日本の高等教育機関の大きな変革の期であったと思います。その後大学はともすれば科学研究費のような外部資金獲得、教育GPのような特別教育支援経費の額で評価される時代になりました。しかしそのことが評価の尺度の一

番目では、企業と変わらなくなります。高等教育機関として、学生、企業、社会に評価されるためには、優れた研究成果をあげることに、優秀な学生を育てることが非常に重要だと信じています。そして、教員が安心して本来の業務に集中できるよう、本学の研究・教育環境を保障していくことが私に求められていることだと思っています。本学の存在価値を高めるべく、皆様の力を借りながら、全力を尽くしたいと思います。よろしく願い申し上げます。



MESSAGE

理事(総務・財務・経営担当)・事務局長
宮崎 一之
—
KAZUYUKI MIYAZAKI

>>> 理事・事務局長就任にあたって

8月1日付で鳥越前理事・事務局長の後任として着任致しました宮崎です。

日本経済は急速な少子・高齢化に伴う医療、年金等の社会保障費の急増に伴う持続的社会保障制度の構築、さらには昨年、秋に発生した世界的な金融危機等で未だ、実体経済が低迷している状況で我が国は非常に厳しい財政・経済状態が続いていますが、やはり、日本経済を支えるのは優れた技術開発であり、経済成長の原動力です。本学は基本理念が明確であり、実践的・創造的能力を備える国際的に通用する指導的技術者・研究者を養成することを目的としてお

り、重要な社会的使命を担っていると認識しております。21世紀は過度な市場経済主義が引き起こした格差社会、そのひずみが拡大しつつある現代において、利に流されず人が人を思う社会を築く一員として長岡には「米百俵の精神」、「天地人」の義と長岡の名将直江兼統の兜に掲げた「愛」の精神があります。この素晴らしい教育環境の地で本学のVOS(Vitality: 活力, Originality: 独創力, Services: 世のための奉仕)の精神をモットーに教育・研究のさらなる高度化、人間性豊かな人材養成に少しでも貢献できればと思っております。



MESSAGE

前理事・副学長
(研究・入試・学生担当)
丸山 久一
—
KYUICHI MARUYAMA

>>> 退任にあたって

Time flies!

今の実感は、まさにこの言葉の通りです。改めて、6年前に小島先生に呼ばれたことが昨日のように思い出されます。前回までは一委員でいたのに、突然、教務委員長として会を取りまとめる立場になり、慌てたものでした。副学長になって半年後に、国立大学が法人になり、小島学長の指示の下で、組織体制の整備に日夜を費やしていたことも懐かしく思い出されます。5年以上が過ぎ、法人としては、どうにか落ち着いてきたように感じます。私個人としては、教務委員会をはじめ、入試委員会、研究委員会、学生委員会等、学内の経営に当たらせて頂くことができ、大学がどのように運営されているのかが少し分かりました。また、法人化後の競争的環境の中で、本学は教職員の皆さまのご努力により、概算要求、外部資金の獲得、

各種プロジェクトの推進等、大きな成果を挙げてきています。

なお、多少、気になるのは評価のあり方です。ノーベル賞受賞者のお話は、大学本来の教育研究の姿を見失うなど言っているように聞こえます。私は、まだ少し時間が残されていますので、今後の進む道について静かに考えてみようと思っています。いろいろとありがとうございました。



MESSAGE

前理事・副学長
(評価、産学官・地域連携担当)
西口 郁三
—
IKUZO NISHIGUCHI

>>> 退任にあたって
—大学大競争時代での長岡技術科学大学への期待—

近年、半数以上の私立大学の入学者が定員を割り、急激な少子化を迎えて国立大学法人の数を着実に減らす計画が進められ、都道府県名のついた大学の社会的・政治的な有利さの下に、その他の国立大学としては、活性、競争力、機能や特色等の面で如何に優位性を勝ち取るかが、今後の大学の盛衰だけでなく、存続に関わる重要問題となっております。

そこで、応募や運営に関わる教職員の業務の偏りの是正と共に、運営方針や内容の検討・決定と申請書・図等の作成の人的分担を検討しつつ、平素の教育研究・社会貢献活動に加えて、種々のGP、プログラムや振興調整費に活発に応募し採択される事が、経営面だけでなく、社会的・政治力学的に大変重要だと思います。

最後に、平成8年4月に化学系(現物質・材料系)教授に就任、平成20年3月に定年退職、今日までの理事・副学長としての勤務の中で、服部元学長、小島前学長をはじめ多くの関係教職員の皆様には大変お世話になりました。

この間、国際電気化学協会のM. M. Baizer 賞及び[Fellow]の称号、有機合成協会賞や新潟日報賞を受賞させて頂くと共に、前川博史准教授や博士11人を含む約50人の大学院修了学生等に囲まれ、67年間の波乱万丈の人生の中で最も素晴らしく、最も幸せで、最も充実した「紅燃ゆる人生」を本学にて過ごさせて頂いた事に、衷心より厚く御礼申し上げます。

本学の益々のご隆盛と教職員の皆様のご健康と御発展をお祈り申し上げます。

行事報告

オープンキャンパス



7月26日(日)に開催したオープンキャンパスには、高校生を中心として、県内外から昨年より200名多い662名の皆様に参加いただきました。蒸し暑い天候の中、本学を訪問し、模擬講義や公開研究室など多様なプログラムに参加いただいたことに、心より御礼申し上げます。

当日は、物質・材料系 五十野善信教授による模擬講義「タイヤ・テクノロジーの進歩～あくなき安全性の追求～」を始め、44の研究室による公開研究室見学、学生による工学分野の説明、入試・学生生活・就職状況等に関する説明会や学生による英語のオーラルプレゼンテーション(研究論文発表)などが行われました。

公開研究室見学では、現在各々の研究室が行っている最先端の研究を大学院生が分かりやすく解説し、参加者は、それぞれ興味・関心のある研究室を訪ね、熱心に説明を聞き、積極的に質問をしていました。

また、オープンキャンパス終了後に行ったアンケートでは、下記のようなご意見が寄せられました。

- 思っていた以上にキャンパスが大きくて、充実した設備で学習や研究に取り組みそうで、とてもいい印象を受けた。
- 研究室が多く多様な研究が行われていることが、たのめしく思えた。
- 環境がよくて、教授の方や学生さんたちの説明がとても丁寧で、どんな研究をしているのかわかり、興味、関心をもてた。
- 現役の学生の話などで様々な場面でも世界に通用する技術や発想を持っていることにとっても印象を受けた。

なお、今回参加できなかった方でも、本学では見学のご希望があれば可能な限り対応するようにしています。

■お問い合わせ/学務部入試課入学試験第2係

Tel: 0258-47-9258 e-mail: nkoho@jcom.nagaokaut.ac.jp

メキシコ・デイin長岡



7月20日(月・祝)に、本学で研修を行ったメキシコの大学生と市民の交流イベント「メキシコ・デイin長岡」を開催しました。

本学ではメキシコの複数の大学との間で国際連携教育プログラムを進めていることから、ヌエボレオン大学、モンテレイ大学の学生が、本学に2週間滞在し、研修を行いました。これを機会に、駐日メキシコ大使、長岡市長をお迎えして、一般市民の方々も交えて日本とメキシコの親睦・交流を深めました。

イベントではメキシコ人留学生から日本語でのショートスピーチや海外実務訓練でメキシコに行った本学学生からスペイン語での体験談の発

表がありました。

また、親睦・交流会では、本学博士課程学生、特別聴講生として学んでいるメキシコ人留学生による日本留学体験談の発表があり、メキシコ料理と地元長岡の郷土料理を味わいながら、日本とメキシコ両国の文化を紹介をしました。本学の学生からは悠久太鼓や茶道、空手が披露され、メキシコ人学生からは、くす玉割りやスイカ割りを合わせたような遊び「ピニャータ」の実演や、メキシコ風ビンゴゲーム「ロツテリア」などが紹介され、互いの文化を知るいい機会となりました。

ご参加いただいた方々に感謝申し上げます。

The 9th Kansai Model United Nations Conference

模擬国連会議 関西大会参加報告



大会終了後の集合写真



大会後のレビュー風景



普段の活動

初めて模擬国連大会に参加しました

神戸国際会議場で8月5日から7日まで2泊3日で開催された第9回模擬国連会議関西大会に参加しました。模擬国連大会は、実際に各国の大使が集まりニューヨークの国連本部などで開催されている国際会議を再現して会議を行う大会で、今回私はケニア大使として「持続可能な開発における教育」というテーマに挑みました。

会議の論点は国際社会の枠組みの中でどのようにして有用な教育を発展途上国で提供出来るようにするか、です。私のような発展途上国を担当する参加者が先進国を担当している参加者にどのように援助の充実を迫れるかがひとつの争点となります。しかし、他の参加者が非常にしっかりとしたリサーチをして強力な論理武装をしているのに対して、私は初参加でリサーチ不足ということもあり、経験豊富な他の参加者の会議進行につい

て行くだけでも精一杯でした。また、参加者の大会に対する意気込みも非常に高く、その熱意だけで圧倒されそうな議論も多々行われていました。私は会議に参加する以上は何らかの功績を残したいと考えていましたが、他の参加者のハイレベルな議論によってその願いは見事に打ち砕かれた形になり、悔いの残る会議となりました。

しかし今回大会に参加してみて、国際会議で行われる議論の雰囲気を感じることができ、複雑な国際問題や国際政治の力学を理解するのにも役立ちました。また、普段は会うことのない分野の学生と議論を戦わせることができたのは非常に有意義で刺激的な体験で、とても勉強になりました。今後も大会に積極的に参加して、いつの日か他の参加者を圧倒するような熱い議論を行えるようになりたいと思います。



模擬国連サークル代表
機械創造工学課程3年

山根 智洋

(広島商船高専出身)

TOMOHIRO YAMANE

【私の抱負】

新任の教員から、目指している研究や今後の抱負を語ってもらいました。



新たな挑戦

経営情報系 教授
松川 文彦
FUMIHIKO MATSUKAWA

7月1日付けで本学経営情報系に参りました。これまでは経済産業省において、エネルギー政策、産業技術政策などの企画立案に携わってきました。今回のポストでは経済産業省において進めている産業技術政策や中小企業政策を学生に講義をする立場となり、これまでとは違う立場ですができるだけ分かり易く政策を伝え、学生が社会に出た後に役立つような生きた情報を伝えていきたいと思ひます。

経営情報系の講義以外にももう1つミッションがあり、それは本学において原子力の人材を育成するための準備です。これまで経済産業省においてエネルギー行政に携わってきた中で得られた情報、人脈、経験を活か

して他の先生方のお手伝いができればと思ひております。長岡は柏崎刈羽原子力発電所がすぐ近くにあるのですが、あまり意識されていないように感じます。安易に厄介者扱いするのではなく、きちんと技術的に正面から取り組んで理解し、地域振興に上手に利用していく必要があると思ひます。

長岡という地において生活して感じましたのは、勉学にはとても環境のよいところであるということです。私自身もこの2つのミッション以外に自分なりのテーマを見つけて自己修練に取り組みたいと思ひております。今後とも皆様のご指導をよろしく願ひします。

退職にあたって

お世話になりました



経営情報系 教授
現 日本フェロアロイ協会 専務理事
阿部 俊明

TOSHIAKI ABE

6月30日をもちまして、技大を去ることになりました。2007年の7月に技大に来ましたので、ちょうど2年ということになります。

大学に勤務しまして、徐々に若い人達に囲まれ、自分も若くなったような気がしました。若い学生は大学の宝だとつくづく思ひます。大学は、このような若い学生が力を発揮し、人生を自分の力で切り開いていけるように手を貸していくことが大切だと感じました。

大学の先生のバックグラウンドは、最近、多岐にわたるようになってきています。私は、経済産業省の出身ですので、日本経済、産業政策、民間企業の経営等自分の仕事の経験をもとに、学生達にいろいろな



研究室にて

ことを教えてきたつもりです。

学生時代は、人生の中で最も輝いた、貴重な経験がたくさんできる時期だと思ひています。このような時期に、自分がどのように生きるのかを考える上で、専門はもとより雑多な知識を吸収することは、将来きつと力になると思ひています。このようなことに、私も少しはお役に立ったのであれば幸いです。

短い期間でしたが、皆さんに大変お世話になりました。有難うございました。

日本学術振興会 (JSPS) の外国人特別研究員 (欧米短期) プログラムで本学を訪れ、4ヶ月間 生物系・古川教授の指導のもと研究に従事しイギリス (マンチェスター大学) に帰国した ジョセフ・フォグルマイヤー研究員に、本学での研究や日本で過ごした感想などを執筆してもらいました。



特別研究員

Josef Voglmeir



Nagaoka University of Technology vs. University of Manchester (UK)

My Name is Josef Voglmeir and I had a chance to visit the Nagaoka University of Technology this spring for four months. In this article, I would like to share my impressions from here and compare them with my University back home in England.

Since I started my doctor studies in Biochemistry in Manchester three years ago, one major goal for me was to spend a part of the time in Japan. I was always fascinated at poster presentations and conference talks from the dedication of Japanese researchers, and I wanted to experience this way of scientific passion. Fortunately I got in contact with Prof. Kiyoshi Furukawa from the Department of Bioengineering, and he helped me to organize a research proposal about "Isolation of a novel planarian gene that encodes a sugar binding protein." A couple of months later the project was accepted by the Japanese Society for the Promotion of Science (JSPS)!

To arrive in a strange country is always a challenge: finding directions, renting a flat, register at the University or to open a bank account – all these tasks can be time consuming and nerve wrecking – but in contrast to my initial time in Manchester where I needed several weeks to organize these essential things, here in Nagaoka most of them were already organized when I arrived! I could start to work on the project within the first couple of days.

One major difference between the two Universities is that both Bachelor and Master students here in Nagaoka are much more involved in actual research topics, whereas in Manchester these courses are almost entirely based on theoretical class work. Research in England is entirely performed by doctor students and postdoctoral researchers. For me, it was a huge surprise how complex and detailed in Nagaoka the research projects for undergraduate students are.

During my stay at the Nagaoka University of Technology, I had also a chance to learn about the Japanese language. Some phrases are used often in daily conversations, but one word I never heard was "no". There was not one single occasion where the laboratory members did not try to solve a problem, rather than looking for an easy excuse. I think this is a key for the success of science in Japan, and I want to apply this positive approach also back home in Manchester!



A farewell party for Josef at Wa-Raku on June 23, 2009.

長岡の歴史探訪

【中世編】

生物系 准教授
高原 美規
YOSHINORI TAKAHARA



大榎



流鏝馬



金峯神社

長岡発祥の地 蔵王

せんと君は平城京遷都1300年祭の Mascot ですが、長岡蔵王の金峯神社も今年、創建1300年と伝えられる由緒ある神社です。和銅2年(709年)に吉野の蔵王権現を勧請したのがその創建と伝えられ、仁治3年(1242年)に現在の鎮座地である蔵王の地に遷座したと伝えられます。

信濃川の水運の拠点に蔵王権現の信徒が集まることで、中越地方の中心として栄えていきましたが、南北朝時代には北朝側の中条氏が隣接地に本陣を構え、蔵王堂城を築きます。動乱の中で一時南朝側に帰属するなど紛争の焦点となりますが、最終的には北朝側足利幕府の関東公方、管領の支配に

属するようになります。蔵王堂城はその後、上杉謙信の叔父、長尾為重が堀と石垣を備えた平城として本格的に築城しその本拠とします。上杉家が会津に移り、長岡城が作られるまで、蔵王の地はこの地域の中心であり、長岡の礎ともなった長岡発祥の地とも呼ぶべき故地なのです。

社殿は再建で1300年の縁は量れません。7月の例祭では源義家の奥州征伐以来とされる流鏝馬が奉納されます。また、参道脇には蔵王の大榎と呼ばれる大樹があります。樹齢800年のこの古木は南北朝の動乱から今日まで、長岡の歴史とともに生きてきたのです。

追悼 芹澤尚先生



芹澤尚先生を偲んで

芹澤尚先生は産学融合トップランナー養成センターに所属された第一級の研究者であられました。平成19年度、当センターは自由かつ卓越した研究環境を条件として人材募集を行いました。尚先生は世界中からの数十倍の応募者の中より厳選して採用された方です。ご着任後は、それまで進めてこられた基礎科学の研究に加えて、産学融合の理念に基づく実用的研究も意識され、ご自身の研究哲学に若干の軌道修正を行うなど、非常に優秀であるとともに柔軟な対応

産学融合トップランナー養成センター長 植松 敬三
KEIZO UEMATSU

力も持ちました。長岡での研究をエンジョイされつつ、強いご意志をもたれ大きな目標に向かう姿勢は、他の研究者の手本ともなるものでございました。周囲からは未来のノーベル賞候補として認識され、ご本人もそれに向かって着々と成果を上げられておられましたところ、突然夭折されましたことは誠に痛恨の極みでございます。在りし日のお姿を偲びつつ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

芹澤先生へのお礼の言葉

芹澤先生は生命科学の分野の研究者が一生に一度、掲載されれば大満足と云われる Nature, Cell, Science の全てに論文を掲載されておられる若手の超一流の研究者であることは今更、云うまでもないことです。本学にとってこのような優秀な研究者が在籍していることだけでも大きな意味がありますが、それにも増して芹澤先生が本学にいられたことを一番、喜んだのは私であると確信しています。私たちの研究室から投稿した論文に対する審査員からのコメントで、私たちが持っていない技術を使用した実験の追加を要求され、困って芹澤先生に相談して実験を手伝って頂いた結果、うまく論文が受理されました。また、長年、どうしてもうまく行かない実験があり、学生に相談に行かせてアドバイス

副学長(国際交流担当) 生物系・メンター 渡邊 和忠
KAZUTADA WATANABE

を受けさせたところ、学生でも簡単に成功させることができました。後で解ったことですが、この実験は世界的にも難しいと云われている実験で、極めて要点をついた適切なアドバイスを受けるとこんなにも簡単に出来てしまうものかと驚いています。芹澤先生はむしろ私たちの研究室のメンターとしての役割を果たして下さっていたようです。今後、まだまだ教えて頂くことも多く、一緒に研究が出来ると喜んでいて矢先に鬼籍に入られたことには言葉もありません。芹澤先生に大変、お世話になった私の研究室の霜田靖助教、大学院生共々、心からご冥福をお祈り致します。短い期間でしたが本当にありがとうございました。

若き人生を駆け抜けた人

生物系長 古川 清
KIYOSHI FURUKAWA

若手人材育成プログラムが採択され、生物系は2名の人材を採用すべく、国際公募の書類を審査した。最終候補に残ってくると、今の若手研究者の業績欄には CNS と呼ばれる3大誌 Cell, Nature, Science (インパクトファクターが30前後)が顔を揃えてくる。そんな一人が芹澤尚君であった。彼が研究について話を始めると、そこに吸い込まれて行くようにサイエンスにスマートさがあり、「実にいい仕事だな」と私は心の中で感嘆していた。

お母さんの話によると尚君は高校1年までサッカー少年、その頃読んだノーベル賞受賞者の伝記に感動し、将来はノーベル賞を取れるような研究者になりたいと一念発起し、努力に努力を重ねたとのこと。東大理学部生化学教室に進み、嗅覚神経回路形成のメカニズムの解明に、全身全霊を打ち込んできた。東京郊外に実家がありながら「正月と母の日」の2日しか家に戻

らないハードワークの日々は、知らないうちに彼の肉体を蝕んでしまったようだ。これまでの発表論文を見ると、自分の進むべき道を見つけ、その先にノーベル賞が見えそうであっただけに、その夭折が惜しみきれない。我々研究者が一生かかってなかなか3大誌に掲載できないことを考えると、尚君は遥かに我々の上を行き、短い人生の中でも研究者の本分を果たしたものと思われる。彼を一翼として生物系の今後の発展を計ろうとしていただけに、その損失はあまりにも大きい。できることなら彼の無念を我々一人一人が噛み締め、それぞれの道でさらに頑張ろうではないか。尚君とは短い接触ではあったが、彼の志の深さに触れ得て感化され、うれしい人生の邂逅でもあった。合掌。

平成21年7月29日

トピックス

TOPICS

新着ニュース

- 2009.8.20-21 高等専門学校及び技術科学大学図書館情報シンポジウムを開催しました。
- 2009.8.4-18 平成21年度高大連携事業(高校生講座)を開催しました。
- 2009.8.4-7 数学アカデミー「熱中!感動!夢づくり教育」が開催されました。
- 2009.8.1 長岡まつり「大民踊流し」に参加しました。
- 2009.7.31 eラーニング高等教育連携(eHELP)全体会議を開催しました。



高大連携事業(高校生講座)の実験風景